

少子高齢化に悩む地域と進路未定者に悩む学校 両者が連携し進路達成率100%へ

毎号1校ずつの高校にご登場いただき、進路指導の取り組みをご紹介します。
今回は地元企業への就職者数を伸ばしたことから、入学者減少傾向も緩やかになり、
進学希望者も活気づいている郡上北高校。地域と連携し生きる力を育てる取り組みをご覧ください。

取材・文／永井ミカ

郡上北高校 (岐阜・県立)

School Data

1948年創立 / 普通科
生徒数280人(男子147人・女子133人) / 進路
状況(2017年3月実績) 大学進学13人、短大進学
8人、専門学校進学23人、就職36人、その他3人

進路指導主事
(取材時)
田代源治先生



図1 郡上北高校の学科・コース

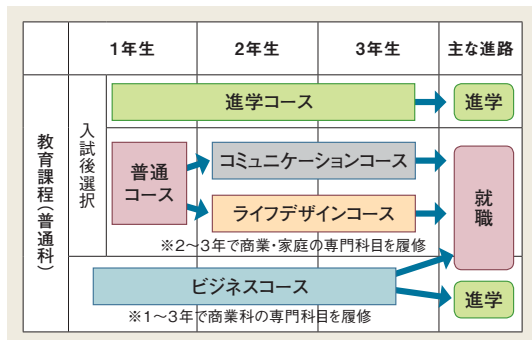


図2 10年間をかけて設計・実現した
地域連携によるキャリア教育(抜粋)

郡上未来塾	2006年度～	ハローワーク岐阜郡上、郡上市雇用促進協議会と共催する就職希望者向けの講座
インターンシップ	2010年度～	2011年度からは2年生全員が地元企業の協力のもとで就業体験を実施
中高一貫教育に関わる交流事業	2010年度～	<ul style="list-style-type: none"> ●郡上北高校の生徒による白鳥中学での「先輩に学ぶ会」の実施 ●ビジネスコースの体験入学など
外部リソース活用研究事業	2013年度～	地域の企業と連携し、企業人として活躍するための専門知識を学ぶ研修。 <ul style="list-style-type: none"> ●コミュニケーションコース：ビジネスマナー研修 ●ライフデザインコース：介護実習 ●ビジネスコース：企業から出された課題解決に取組む学習「クエストエデュケーションプログラム」

全体設計

地域の中での役割を位置づけ
3年間の指導計画を作成

同校では2003年ごろ、進路未定者

変更は少ない。
る生徒(家庭)が多く、3年生以降の進路
比較早い段階で進学か就職かを決めてい
路指導を行う。前述のような事情から進
それぞれに進路希望の実現に向けて進
同校では普通科を4コースに分け生徒
6割から7割となっている。
合、地元郡上市内で決まる割合がおおよ
イコール家を出ることだ。一方、就職の場
学や専門学校はないため、進学すること
徒のおよそ半数が進学するが、周囲に大
近く、自然豊かなところにある。例年、生
よそ3時間、長良川鉄道のみ濃白鳥駅の
岐阜県立郡上北高校は名古屋からお

が10名を超える時期があった。指導がな
かなか届かず、入学者の減少や就職者の
早期離職などの課題もあった。同時に郡
上市周辺は少子高齢化が急速に進む地
域のひとつ。地元企業に就職する、または
都市部の大学等に進学しても地元に戻っ
てくる人材の育成が地域の教育現場に
求められていた。そこで、10年ほど前か
ら、当時の進路指導主事であった山田徹
先生(現教頭)を中心に学校改革がスタ
ト。地域と連携してさまざまな取り組み
が行われ始めた。
なかでも象徴的なのが「郡上未来塾」。
郡上市雇用対策協議会との共催による
就職希望者向け講座で、マイナーチェンジ
を繰り返しながら10年以上続いている。
未来塾を始めて以来、地元での就職者の
増加などの一定の効果が上がったことか

図3 進路指導の年間指導計画(主なものを抜粋)

		就職	進学
1年生『自己理解』	4月	進路発見検査	
	5月	進路希望調査	
	6~9月	職業いろいろ発見	
	8月	進学補習	
	10月	進路希望調査	
		卒業生と語る会	進学説明会
	10~2月	職業調べ	
2年生『自己啓発』	1月	就職ガイダンス	学校見学会
	4月	進路発見検査	
	5月	進路希望調査	
	6月	インターンシップ(企業研究→就業体験→報告会・発表会)	
	8月	オープンキャンパス	
		進学補習	
	10月	進路希望調査	
3年生『自己実現』		進路希望調査	
	4月	就職タイムスケジュール説明会	進学タイムスケジュール説明会
		郡上未来塾①	
	5月	職業適性検査	
		郡上未来塾②	面接マナー講座
	6月	郡上未来塾③	
	8月	就職校内選考会	夏季特別学習会
		オープンキャンパス	
	9月	面接指導、事前指導	進学推薦委員会
	11月	一人暮らしセミナー	
	12月	社会人マナー講座①	
	1月	社会人マナー講座②	

進路目標

最終的な個々の進路実現に向け、具体的な努力や対策が確実に実行されるよう指導する

進学補習・模試

ら、インターンシップ、中高連携事業、外部リソース活用研究事業、職業人講話、社会人マナー講話と、地域連携、外部連携しながらの取り組みが増えていった。改革期には職業調べや卒業生と語る会などで職業観育成にも着手。総合的な学習の時間を使った体系的な進路指導を設計した。基本方針は「生徒が自己の在り方、生き方を考え、主体的に情報を収集し、行動する力を養い、自己の進路を選択・実現できるように計画的・継続的に進路指導を行う」こと。各学年の進路目標は、「1年は「自己理解」自身の資質を見つめ、将来の夢を描く」で、進

路の知識と自己の適性を理解させながら進路意識を自覚めさせること。2年は「自己啓発」進むべき道を意識し、自己の進路を考える」とし、自己理解を深め体験的学習等を通して情報収集し、具体的な取り組みを考えさせ、判断能力を育ませる。そして3年は「自己実現」希望する進路に挑み、夢への第一歩を具現化する」と。そして各学年目標に沿った3年間の進路指導計画を固めた。これら一連の取り組みが評価され15年12月にキヤリア教育優良学校として文部科学大臣表彰を受けている。3年間を通じた指導計画やオリジナル

のワークシート類が完成したおかげで、指導を学年団に任せられる部分が増えた。「1年生の取り組みはほぼ学年の先生にお任せしています。あまり細かい設定や視野を狭めるようなことをせず、進学、就職関係なく、自己理解と職業観の育成が図れば」と進路指導主事の田代源治先生は言う。その後、1年生10月の就職希望者向け「卒業生と語る会」を皮切りに、進路指導部主導の取り組みが増えていく。これらの取り組みの結果、進路決定率は進学、就職とも100%を達成。入学者数の減少も緩やかになってきている。

インターンシップ
全員参加で職業観を育成
生きる力をつける

同校のインターンシップは最初、希望者のみを対象に夏休み期間に小規模で行っていたものが、11年度より2年生全員参加となった。以前はなかなか受け入れ事業所の開拓に手が回らなかったのだが、県から就職指導員が派遣され事業所開拓に積極的に取り組んでくれたためだ。「生きる力を育成する取り組みとして全員参加が望ましい、特に進学する生徒にこそインターンシップが必要ではないかと考えていました」と田代先生は言う。

体験するのは2日間。最初はまず企業に受け入れ可否のアンケートを実施し、生徒の希望などから1事業所2~3人を決める。ここからは生徒が直接依頼をし、オリジナルのインターンシップ記録ノートを活用して目的、心構え、事前の確認事項、注意点などを整理したうえで取り

就職指導
地元就職者を増やしたい
学校と地域の協力体制

郡上北高校と地域の連携が正式な形として始まったのは06年度からの「郡上未来塾」である。以来、就職指導に関しては、常に地域と連携しながら進めてきた。しっかりと地域に貢献できる人材を育てるため、1年生の時点で就職を希望している生徒に対する指導のスタートは早い。まずは就職して2年目の先輩4人を招いてインタビュー形式で話を聞く「卒業生と語る会」を1年生10月に実施する。「これから就職に向けて進路学習をしていく生徒に緊張感をもってもらいたいという思いから始まった取り組み。例えば先輩たちが、どのように高校生から、働く、生活へシフトしていったかなどについてリアルに語ってもらいます。就職して間もない先輩の実感が伝われば、就職後のギャップも多少は埋まり離職率の低下にもつながるのでは」と田代先生。これは2年生も参加するため、1人の生徒が2年にわたって話を聞くことになり、心構えを深めることにつながる。



インターンシップは2年生全員が参加。民間企業のほか病院や保育園、消防署など37カ所が受け入れてくれている。最近では同校の地域連携の取り組みが浸透し、事業所側からの受け入れの打診もあるという。



郡上未来塾は7月1日の求人票受付に合わせて3年生の4月、5月、6月に実施。地元就職への支援や啓発活動になっている。4月は地元企業等の人事担当者による説明。5月は地元で就職してがんばっている先輩を招き、パネルディスカッションやグループワークを行う。



郡上未来塾の仕上げは企業担当者による模擬面接。生徒2名ずつが10分間の面接を受ける。担任も同席して書記として必要事項を書き出し、その後の指導に活かしていく。

2年生の終わりに実施するのは「就職ガイダンス」。厚生労働省キャリア教育「高校生に対する就職ガイダンス事業」を委託しているもので、就職希望者に向けて各教室で終日行う。レッスン1「コミュニケーション能力を高める」から始まり、レッスン2「さまざまな仕事働き方を知る」、レッスン3「会社づくりゲーム」、レッスン4「自分を知り、表現する」、そして最後のレッスン5は「面接を体験する」。生徒は他の生徒が見ている前で面接を受け、アドバイスまでしてもらおう。「外部講師による面接は効果が大きいです。緊張感もあり、経験豊富な講師による指導は効率も高い。これがあることによつて3年生へのスタートがスムーズになっていると考えられます」と田代先生は言う。



のが雇用対策協議会と共催の「郡上未来塾」。1回目(4月)は地元の事業所による説明。体育館に各社のブースを設置し、生徒は1人3事業所の説明を聴く。地元の人事担当者から直接の話とあつて、生徒は真剣に耳を傾けているそう。2回目(5月)は少人数のグループで社会人(卒業生)の話も聴く。テーマは苦勞したエピソードや高校時代の体験、夢や得意なこと、アドバイスなど。最後の3回目(6月)は企業担当者による模擬面接。

進学指導 一斉授業の充実と きめ細やかな個別指導

口頭と面接評価シートへの記入という二重のアドバイスを受けることで、生徒の面接力を高める試みである。この3回の実施時期については7月1日の求人票受付までに完了するスケジュールとなっている。

進路学習の時間が進学・就職の進路希望別の場合、進学希望者に対してはガイダンスやテスト、進路希望調査、学校見学などが行われる。同校の生徒の進学先は専門学校が最も多く、大学・短大は指定校推薦がほとんど。また、ここ数年、難関大学に挑戦する生徒も出始めており、国公立大学の合格者も輩出している。1学年100人に満たない規模の学校で進学先が多岐にわたるため、それぞれの人数は数十名程度。そこで進学指導はオーダーメイド的なものになる。担任、教科担当、進路指導部の連携は引き続きの課題である。

一方で全体的な学力の向上にも力を入れており、例えば近隣の白鳥中学校との連携型中高一貫教育の取り組みの中で、教員が中学校の授業の見学に出かけ、高校の授業でつまづく生徒への対応策を探っている。また中学生と高校生の交流などから高校卒業後の進路を知ってもらうことで、志をもつて入学してくれる生徒も増えた。

同校はこれからも、就職・進学にかかわらず個々の希望をかかなる進路指導に取り組んでいく方針だ。

郡上北高校の進路指導のスタンス

卒業したずつと先に
充実した生活を送れているか

10年ほど前の指導が困難だった時期を乗り越え、改革を進めた郡上北高校。3年間を見通した進路指導計画を立て、一つひとつの取り組みは随時振り返り改良してきた。また、全員参加のインターンシップをはじめ体験的な学習や外部の教育力を活用しキャリア教育を充実。地域との連携は行事参加や交流なども含めた同校の教育活動全般に及び、現在では「地域とともに発展(KCD)プロジェクト」として根付いている。

進路指導主事の田代先生は地域の中で育つ生徒たちを長年にわたつて見てきた。現在の生徒の保護者が以前の教員ということがある。「進路指導をしながら考えてきたのは、家庭をもつ頃の子どもの姿。その頃に充実した生活、満足した生活が送れているかという事です。進学でも就職でもいい。生きるための基礎的な力を身に付けて旅立つてほしいと願っています」と言う。

3年生の進路が決まっても、学校は社会人マナー講座、一人暮らしセミナーなどを開催。生徒たちが進学先、就職先で困らないよう卒業まで指導を続けている。